

剣道連盟



平成元年 体協四十周年記念誌から

沿 革

鑄物の街川口の歴史が、遠く徳川時代に遡る扱に川口市の剣道も随分と古い話になる。残っている近年の記録からみると、寿町に在った本長鑄工所（故本橋武義社長）の先祖に本橋伊三郎氏（上野彰義隊）、生之助氏、正行氏と各秀れた剣客が居り、特に本橋生之助氏は柳剛流の達人岡田重内先生の門人となり、18才頃には既に免許皆伝になり、後、剛剣山岡鉄舟先生に無刀流を学び、益々斯道の奥義を極めた。明治5年頃より、当時川口町を始め、東京府下赤羽稲村方面にまで出稽古をなし、門人を育成する剣道道場春柳館は、山岡鉄舟先生より命名されて初め、錫丈寺前に建てられた。明治32年、再び金山町氷川神社前に移り道場を再建築し、剣道の振興に尽瘁された。大正10年4月、川口警察署が設置されると共に同署の剣道嘱託教師となり、広く警察界にも貢献され、その徳望と抜群の技倆を慕い来り、薰陶を受けし者その数実に1500名に及ぶ。昭和5年2月84才の天寿を完うされる。

一方、その頃には未だ川口市に編入されて居ないが青木村方面にて、元県会議員野呂丈太郎氏父子が主になり、同地区の剣道界に貢献して居た。又、横曽根村においては浜田治雄氏が主となり、少年部には浦和の小室進氏（八段範士県審議員・北浦和雄信館館長）、市川梅吉氏（旧姓福原七段教士・県審査員・川越剣道連盟会長）等がいた。

道場がないので学校の一部を借用し、後に村の公民館を使用し、一時は100名近い青少年が集まって猛稽古をしていた。そして、少年部に於いては県下小学校大会に優勝し、日の出の勢いであった。その後、稽古の中心が川口警察署道場に移り、熱心な稽古が続けられた。師範は鳩ヶ谷の太田吉之介先生（剣道七段範士・銃剣道八段範士・初代鳩ヶ谷剣道連盟会長・元川口警察嘱託教師）及び岡芹雄飛先生（初代雄信館館長・元川口警察嘱託教師・剣道教士）が当たっていた。その頃、川口警察署へ稽古に行き、今日の川口市剣道連盟の基礎を築いた浜田治雄氏・故山崎肇氏・故岡本美之吉氏がいる。

昭和5年、岡芹雄飛氏が本町3丁目に雄信館道場を開き、多くの門人を育成した。その子息、邦男、義雄、信雄、行雄氏の4兄弟は川口市の優秀選士として尊父の遺志を継ぎ、川口市剣道の発展に大きく寄与している。

蕨市の斉藤喜三郎氏（七段教士・県審査員・竹紫館館長）も門人の1人である。

明治、大正、昭和の時代を剣一筋に生きられた川口地方の剣道隆昌の為、一生を捧げられた雄飛先生の陰に賢夫人の控えて居られたことも忘れられない。四男義雄氏は剣道専門家の道を志し、国士舘大学を卒えて県立川口高等学校の先生として剣道を教えていたが、惜しい哉第2次世界大戦で善戦克く敢斗され壮烈な戦死をされた。（27才・剣道五段錬士・陸軍中尉）非常に秀でた熱心な剣士で、現在生存していたならば剣道界の為、多大の

貢献を頂けたのに本当に残念でならない。

現川口市剣道連盟名誉会長の浜田治雄氏（五段教士）は、旧制浦和中学から拓大に進み学生剣道界で活躍し、卒業後、青年団県代表として明治神宮大会に出場、又、秩父の生んだ剣聖高野佐三郎先生に率いられ埼玉軍選手として渡満全満州と対戦、大活躍される等、川口市剣道の名声を天下に轟かした仁志町の故堀内久蔵氏（六段教士・元川口警察嘱託教師）、青木町の故山本亮氏（六段教士）もその一員であった。

終戦後、日本剣道界は今後学校の正科として教育することは禁止するという占領軍からの痛ましい烙印を押され、その当時は剣道の甦る日は想像もできなかった。昭和28年になってようやく認められるに至った。当時、剣道は武道かスポーツかという色々な問題が論じられたのである。

此の間にあって、いち早く岡芹邦雄氏（雄飛氏長男・雄信館2代目館長・元川口警察嘱託教師）は古い門人を集めて道場を再開した。現名誉会長浜田治雄氏・現会長浅倉一二三氏を始め、浅倉氏の実兄金井仲次郎氏もその再開に努力した1人である。そして、昭和28年4月1日川口市剣道連盟が組織立って発足し、県立川口高等学校の楯政知氏（国士館大学出身剣道七段教士・県審議員）も剣道連盟の稽古に積極的に参加され指導を受けるに及んで、技術的に長足の進歩を遂げ、又、隆盛を見るに至った。

此の間、雄飛館岡芹道場は拓大剣道部の合宿強化稽古も行い、意気大いに盛り上がるものがあつた。当時の指導陣は岡芹邦雄館長教士始め、楯政知教士、浅倉一二三錬士、富岡四郎氏、岡芹信雄氏、山崎肇氏、辺田武照氏、海野午吉氏、斉藤喜三郎氏、岡芹行雄氏等元気一杯の四段、五段クラスが元立ちとなり指導に当たり、若手に滝口四郎、福島平八、辺田正己、長谷川光秀等の優秀剣士が居た。雄信館岡芹道場の盤石の構えを見届け、同士の1人浅倉一二三氏（剣道連盟副会長・五段錬士）は川口市西口に住む者が稽古に非常な不便を痛感して居たので浜田治雄氏（剣道連盟会長）、矢島撰一氏（剣道連盟相談役）、利根川良雄氏（地元市議員・剣道連盟相談役）と発起し、養父元市議浅倉市五郎氏の寄宿舍を改造開放し飯塚二丁目205に興道館を開設した。

興道館という名前は、埼玉県剣道連盟の当時の会長・小澤丘先生が命名したものである。此の開校にあたって岡芹邦雄雄信館館長、楯政知教士始め、市内の剣士も支援を惜しまず、稽古も交替に行い雄信館は月・水・金曜日、興道館は火・木・土曜日相互に交流し少年も数百名を数え、一大偉観であつた。当時の興道館浅倉道場の指導陣は、浅倉一二三館長を始め、楯政知教士、小室進教士、松谷光雄錬士、江橋八郎錬士、半田利一郎錬士、富岡四郎錬士、遠山正平、山崎肇、辺田武照、滝口四郎、海野午吉氏の各錬士、市外からは大久保和政氏、金井正氏、野辺多津男氏、坂本治雄氏等錬士の元気どころ多士済々であつた。若手に小倉順二郎、古川長治郎、遠山良雄、高橋石雄、小室駿一郎等の優秀剣士が居た。

県立川口高等学校剣道部も楯教士に率いられ、興道館に於いて春夏合宿して強化稽古を行い、逐年優秀な選手を育くみ県下高校大会に優勝、剣道界に君臨し関東大会、全国大会に県を代表して克く活躍した。無論、このことは川口市剣道連盟ならではの美しい光景で

あり、これに依って躍進の一途をたどるのである。

思えば戦後の荒廃の極みにあって己自身の保持にさえ困難多い時期にあり乍ら、ここに到る迄滅私尽力頂いた幾多諸先輩の熱と努力に対し深く敬意を捧げる次第である。遠く羽生市の小澤丘範士、鳩ヶ谷の太田吉之介範士、東京の羽賀準一範士、宇賀光雄教士、佐藤顕範士、勝谷春助範士等も指導に来館され、忘れ得ない恩人である。現在、川口市の大方の剣士はこの雄信館岡芹道場と興道館浅倉道場の門を叩いた人達である。海野午吉（錬士五段・鑄造業）も非常に剣道への熱意を持たれ、両道場に習技の傍ら昭和38年8月、飯塚町3丁目の自宅にウミノ剣道場を開設し、青少年の為、市内高段者の協力を得ながら指南に当たられたのであるが昭和42年11月9日61才の若さで志半ばにして急逝された。これからの愈々軌道に乗りつつある川口剣道の為、期待するところ蓋ん大なるものある時、本当に惜しい方を失ったものである。

昭和42年初頭より、この川口市剣道の盛況に応えるべく市立武道館建設の議燃え上がり、浜田治雄氏、浅倉一二三氏陣頭に立ち、建設嘆願書署名運動を展開し、鉄壁の布陣の下、市当局、各市議への陳情も奏功し、昭和45年5月10日念願の市立武道館が1200坪の敷地に2億1000万円の巨費を投じ大林組の手に依って竣工落成されたのである。これも当時の市長大野元美氏の政治力と、それに見合う川口市剣道連盟積年に亘る努力精進の賜である。茲に盤石の態勢が出来たのを機会に、雄信館、興道館共に発展的に解消し、川口市剣道連盟一本に統合し、連盟の中央道場として大会、講習会、審査会等も行う様になった。

又、久しく川口剣道界から離れて居た市職員の宮岡七郎七段教士始め、松下善太郎五段を武道館専任職員として迎える努力も実を結び、これに市内在住の高段者の協力を得た強固な陣容を整えることが出来た。以来毎週月、水、金曜日午後5時より小学低学年の基本組、6時より小学生1時間、7時半より1時間一般（含高校生・中学生男女）の部の稽古が8時半迄熱心に続けられている。火、木、土、日曜も剣道教室、家庭婦人、女子高校生、中学生と交互に時間帯を割愛しあい乍ら、殆ど年中休むことない活況を呈している。恐らく数多い市施設の活用状況から見ても本武道館の活発な利用は、最もたるものと思料する。尚、今回女子用手洗場、更衣室、シャワー室が新設され、昭和63年10月10日体育の日から使用して居るが、家庭婦人、女子高校、女子中、小学生の盛況に応えた処置として感謝に堪えない。一層の感恩報謝を期さなければならない。

各地区にはそれぞれの剣道倶楽部があり、体育館、公民館を利用し活発な稽古が行われて居る。即ち武道館、四誠館、安行、新郷、横曽根、中央、神根東、芝西、南、西、芝スポ、領家、戸塚、朝日東、北スポ、正剣会、春風館等約20箇所、毎年3月の第2日曜日、本年は去る3月13日、回を重ねると17回、第17回川口市少年剣道大会が37チーム555名の少年剣士を迎え一偉観であった。

中学校には男女剣道倶楽部がある。即ち青木、安行東、上青木、神根、岸川、北、小谷場、幸並、在家、芝、芝東、戸塚、仲町、十二月田、西、東、元郷、安行、榛松中学校等

であり、倶楽部顧問の先生に恵まれ年々質量共に充実し、意を強うして居る。毎年建国記念日を、川口市中学校剣道大会に充当し、本年は去る2月11日第5回を男子51チーム、女子27チーム390名の精鋭選手を迎え武道館狭しとばかりの活況であった。最近、各中学校に武道場が逐次出来つつあり、喜ばしいことである。矢張りそれにはそれらしい学校を、地元を動かす様な実績を挙げる必要がある。そうした処に願わなくても温かい支援の手がさしのべられるのである。

川口市高等学校剣道大会を持つことはかつてからの願望であったが、今回高等学校剣道倶楽部顧問の懇情に応え、毎年1月第4日曜日に行うようになった。時期遅し感あるけれど、来年1月16日（祭代替日）を第1回川口市高等学校剣道大会として必ずや積年盛會に高校剣道も大きく成長されることと思う。矢張り1つの目標になる大会を目指し進む処に驚異的發展を遂げて居ることは2月11日の中学校大会、3月の少年大会の躍進が雄弁に物語って居る。他校との対抗試合も結構であるが、これでは生ぬるい全市の高校が一堂に寄り、技を競うことが必要であり、この大会を通して高校の優秀選手が更に磨きをかけ、大きく成長して貰いたい。これが先生の川口市剣道連盟盛衰の分れ目とさえ思われる。高校生、又、顧問も先生方々の一層の奮気を望みたい。県立川口高校、県立川口工高、県立川口北高、市立川口、市立川口女子高、県陽高、武南学園高、青陵高等学校等、本大会に寄せる大きな期待に応じて頂きたい。1月は高校、2月は中学、3月は小学生と3拍子揃って揺るぎない川口市剣道連盟の發展を期したい。

先進都市との交歓大会は本連盟の早くからの取り入れて居った強化策であり、興武館、川越、秩父、会津若松、群馬、静岡、日立、川崎市等交互に遠征し合い、これがどれ程技術向上に寄与したか計り知れない。試合のみならず、試合後の交歓地稽古が素晴らしい。近い処では去る

5月29日川崎市に遠征し114万都市川崎市と対戦、7対2・8分けにて快勝し、面目を一新した。

尚、本年は昭和28年4月1日日本連盟が発足し35周年を記念し「川口市剣道連盟の歩み」が本年1月から10名の編集員を挙げ鋭意努力中で本年12月末に、川口剣道の歴史を会得し、飛躍への大きな励みになるであろう。事は一朝一夕にして成らず。献身、又、挺身、市当局の高志と一般の剣道に寄せる大きな期待に応えんとする思い切なるものがある。